

文芸文庫

竹取物語

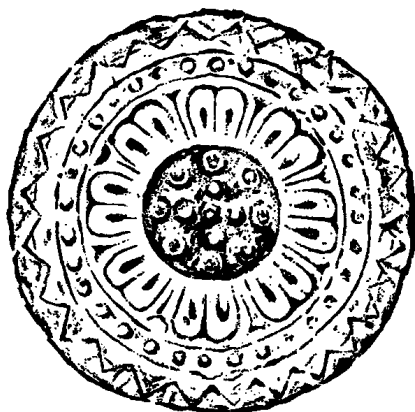
高橋貞一編

日本古典文学

1



勉誠社



竹取物語

文芸文庫 日本古典文学 I

1982年10月1日 初版第一刷発行

定 価 400円

編 者 高 橋 貞 一

発行者 池嶋 洋次

社 誠 勉 株式會社 發行所

〒153 東京都目黒区大橋2丁目12番16号

電話 (03) 460-9761 振替東京3-102739

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 和田製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

竹 取 物 語

高 橋 貞 一 編

文 芸 文 庫

日本古典文学

勉 誠 社

目次

凡例

本文

一 かぐや姫のおひたち……………7

二 つまどひ……………9

三 仏の御石の鉢……………15

四 蓬萊の玉の枝……………17

五 火鼠の皮衣……………26

六 竜の頸の珠……………31

七 燕の子安貝……………39

八 御狩のみゆき……………45

九 かぐや姫の昇天……………52

解説 高橋貞一……………67

凡 例

一 本書の本文は、古活字版十行本を底本とし、誤脱とみられる個所や、通行本と差のいちじるしい個所などについては、天正奥書本（武藤元信氏旧蔵天理図書館現蔵）・蓬左文庫蔵本などを参考して改めたところもある。底本の仮名づかいも歴史的仮名づかに統一し、また句読点を加え、漢字を仮名、仮名を漢字に改めるなど、読みやすいようにした。

一 全篇を田中大秀の『竹取翁物語解』に従つて九分したが、もとより原作にはこのような区分や題名はなかつたものである。

竹
取
物
語

古活字版十行本

一 かぐや姫のおひたち

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつ
つ、よろづの事につかひけり。名をばさるきのみやつことなむいひけ
る。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありけり。あやしがりて寄り
て見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと
うつくしうてゐたり。翁言ふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中に
おはするにて知りぬ、子になり給ふべき人なめり」とて、手にうち入
れて、家へ持ちて来ぬ。妻の女にあづけて養はす。うつくしき事限り
なし。いと幼ければ、籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に、竹取るに、節をへ

だててよごとに、こがねある竹を見つくること重なりぬ。^{かさ}かくて翁、やうやうゆたかになり行く。この児養ふ程に、^{もち}すくすくと大きになりまざる。三月ばかりになる程に、よき程なる人になりぬれば、髪あげなどさうして、髪あげさせ裳着す。^も帳のうちよりも出ださずいつき養ふ。この児のかたちのけそうなること、世になく、^や屋のうちは暗き所なく、光りみちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事もやみぬ。腹立たしき事も慰みけり。

翁竹を取る事、久しくなりぬ。^{いきはひまう}勢猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、名をみむろといむべのあきたをよびてつけさす。あきた、なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらず、よびつどへて、い

とかしこく遊ぶ。

二 つまどひ

世界のをのこ、あてなるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、音に聞きめでてまどふ。そのあたりの垣にも、家のとにも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、よるはやすきいも寝ず、闇やみの夜に出でても、穴をくじり、かいまみ、まどひあへり。さる時よりなむ、よぼひとはいひける。人の物ともせぬ所にまどひありけども、何のしるしあるべくも見えず。家の人どもに物をだに言はむとて言ひかくれども、ことともせず。あたりを離れぬ君たち、夜を明かし日を暮らす多かり。おろかなる人は、ようなきありき

はよしなかりけりとて、来ずなりにけり。

その中になほいひけるは、色好みといはるる限り五人、思ひやむ時なく夜昼きたりけり。その名ども、石作いしつくりの皇子みこ、車持くらもちの皇子、右大臣阿倍あべのみむらじ、大納言大伴の御行みゆき、中納言石上いそのかみのまろたり、この人なりけり。世の中に多かる人をだに、少しもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見まほしうて、物も食はず思ひつつ、かの家に行きて、たたずみありきけれど、かひあるべくもあらず。文を書きてやれども、返事かへりごともせず。わび歌など書きておこすれども。かひなしと思へど、十一月十二月しもつきしはすの降りこほり、六月みなの照りづきはたゞくにもさはらず来たり。この人々、ある時は竹取を呼び出でて、「娘を我にたべ」と、伏しをがみ手をすりのたまへど、「お

のがなさぬ子なれば、心にも従はずなむある」と言ひて、月日すすぐす。かくれば、この人々家に歸りて物を思ひ、祈りをし願^{ねが}を立つ。思ひやむべくもあらず。さりともつひに男あはせざらむやと思ひて、頼みをかけたり。あながちに志^{こころざし}を見えありく。これを見つけて、翁かぐや姫に言ふやう、「我が子の仏、変化^{へんげ}の人と申しながら、こゝら大きさまで養ひ奉る志、おろかならず。翁の申さむ事、聞き給ひてむや」と言へば、かぐや姫、「何事をか、のたまはむ事は承らざらむ。変化の者にて侍りけむ身とも知らず、親とこそ思ひ奉れ」と言ふ。翁、「うれしくものたまふものかな」と言ふ。翁、「年七十に餘りぬ。今日^{けふ}とも明日^{あす}とも知らず。この世の人は、男は女にあふ事をす、女は男にあふ事をす。そののちなむ門^{かど}広くもなり侍る。いかでかさる事な

くてはおはせむ」。かぐや姫のいはく、「なんでふさる事かし侍らむ」と言へば、「変化の人といふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむ限りは、かうてもいますかりなむかし。この人々の年月をへて、かうのまいましつゝのたまふ事を思ひ定めて、ひとりひとりにあひ奉り給ひね」と言へば、かぐや姫のいはく、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、のちくやしき事もあるべきをと、思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き志を知らでは、あひ難しとなむ思ふ」と言ふ。翁のいはく、「思ひのごとくものたまふかな。そもそもいかやうなる志あらむ人にか、あはむとおぼす。かばかり志おろかならぬ人々にこそあめれ」。かぐや姫のいはく、「何ばかりの深きを見むと言はむ。いさゝかの事なり。人の志ひとしかんなり。いかで

か、中に劣り勝りまさは知らむ。五人の中に、ゆかしき物を見せ給へらむに、御志まさりたりとて仕うまつらむと、そのおはすらむ人々に申し給へ」と言ふ。「よき事なり」とうけつ。

日暮るる程、例の集まりぬ。或は笛あるいを吹き、或は歌を歌ひ、或は唱しやう歌がをし、或はうそを吹き、扇をならしなどするに、翁出でていはく、「忝かたじけなく、きたなげなる所に年月をへて物し給ふ事、極まりたるかしこまり」と申す。「翁の命、今日明日とも知らぬを、かくのたまふ君達だちにも、よく思ひ定めて仕うまつれ」と申すも理ことわりなり。「いづれも劣り勝りおはしまさねば、(定め難し。ゆかしく思ひ侍る物の侍るを見せ給はむに)御志の程は見ゆべし。仕うまつらむ事は、それになむ定むべき」と言へば、「これよき事なり。人の恨みもあるまじ」と言ふ。五

人の人々も、「よき事なり」と言へば、翁入りて言ふ。かぐや姫、「石作の息子には、仏の御石の鉢みいし はちといふ物あり。それを取りて賜へ」と言ふ。「車持の皇子には、東ひんがしの海に蓬萊といふ山あるなり。それに銀しろがねを根とし、金こがねを茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折ひとえだりて賜はらむ」と言ふ。「今一人には、もろこしにある火鼠のかはぎぬを賜へ。大伴の大納言には、龍たつの頸くびに五色いついろに光る珠あり。それを取りて賜へ。石いその上の中納言には、燕つばくらめの持もたる子安の貝、取りて賜へ」と言ふ。翁、「難き事にこそあなれ。この国にある物にもあらず。かく難き事をば、いかに申さむ」と言ふ。かぐや姫、「何か難からむ」と言へば、翁、「とまれかくまれ申さむ」とて、出でて、「かくなむ。聞ゆるやうに見（せ）給へ」と言へば、皇子達みこたち、上達部かんだちめ聞きて、「お

いらかにあたりよりだになありきそとやはのたまはぬ」と言ひて、うんじて皆帰りぬ。

三 仏の御石の鉢

なほこの女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺にある物も持て来ぬものかと思ひめぐらして、石作の皇子は心のしたくある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百千万里の程行きたりとも、いかでか取るべきと思ひて、かぐや姫のもとには、「今日なむ天竺へ石の鉢取りにまかる」と聞かせて、三年ばかり、大和の国十市とをちの郡こほりにある山寺に、賓頭びんづる盧の前なる鉢の、ひた黒にすみつきたるを取りて、錦の袋に入れて、作り花の枝につけて、かぐや姫の家に来て見せけれ